

人権なら

2016年5月1日

第65号

NPO なら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

あふれる子どもの笑顔

「ひまわり」が子どもの居場所づくり活動

社会福祉法人「ひまわり」が3月28日、上但馬団地解放会館で「子どもの居場所づくり」活動を行った。

午前10時。子どもたちが集まりだし、この日の計画が説明された。早速、「餃子」の準備が始まった。水洗いしたキャベツ

やニラを小さく切る。それをよく絞ってからあいびきのミンチ肉とまぜ、塩・コショウを少しふりかけ、ごま油で香りをつけ、よく混ぜる…。子どもたちはエプロンにバンダナ姿も凛々しく、ワイワイと元気が良い。



次に、餃子の皮に具をのせ、包んでいく。上手、下手があり、ユニークな餃子が

できる。子どもたちは楽しそう。おにぎりも一緒に作り、いよいよ焼き餃子が始まる。部屋中に美味し匂いが広がる。「いただきます！」で、全員が食べ出す。熱い餃子を「ふうーふうー」と口にほお張る。美味しい笑顔があふれた。午後は、隣接の体育館で恒例のドッチボールをして、楽しんだ。



この活動は「支援が必要な子ども居場所づくり事業」として、県の助成を受けている。子どもたちを「まるごと受け入れ、安心できる居場所」。そんな場と、日常的な支援の大切さを感じた。

創作した作品を展示

ひまわりの家のメンバーたちが「アート展」

第2回「わたしたちのアート展」が4月1日から28日

まで、三宅町「あざさ苑」1階にある、ひまわり喫茶「みそら屋」であった。



「ひまわりの家」に通うメンバーたちが、自分たちが創作した数々のアート作品を出展した。絵画のほか、かわいい猫を描いた紙製のブックカバー、布のトートバック、Tシャツに描いた絵、靴に描いた絵もあって、見ていて楽しかった。

アート展は元気が出るウキウキする企画で、会場全体のレイアウトも素敵だった。



生き生きとした働く姿に出会える「みそら屋」

もう一つの楽しみは、ひまわりのメンバーたちの生き生きと働く姿に出会えることだ。みそら屋は「障害を持つ人たちが力を合わせて働く場」だ。

喫茶も充実し、美味しい日替わりランチがワンコイン(500円)で食べられる。

皆さんも気軽に立ち寄って、喫茶を楽しんだり、かわいい「みそら屋だより」をゲットしてみられてはいかがでしょうか。



ランチメニューや、楽しい情報が掲載されています。

ランチの予約などの問い合わせは、ひまわりの家・喫茶みそら屋:0745-42-2919まで。

横浜と場を訪問し交流

総勢42人が2日間の研修ツアー

3月29日・30日に「横浜と場」を訪問し、現場見学と交流を行った。この研修ツアーには、京都で肉の小売りなどの事業を展開する「肉のやまむら屋」の山村宙載さんと、スタッフ26人、「ひまわりの家」から施設長の喜多学志さんと、新人スタッフ8人、三宅小学校と上牧小学校の先生たち、古川沙樹さん(NPOサンタピアップ)ら、総勢42人が参加した。



と場の人たちとバーベキューで交流

一行は29日午後3時過ぎに「横浜中央卸売市場食肉市場」(横浜と場)に到着。労組の川越秀一・委員長から「現場で働く人たちをしっかりと見て下さい」とあいさつを受けた。丸岡博秋・副委員長から、と場労組の活動や「と場差別との闘い」などについて話を聞いたあと、と場内を案内してもらった。2007年作成の本『横浜屠場における差別との闘い』を全員にいただいた。



と場の現場見学では、枝肉積み込み所ー大型動物けい留所(牛)・小型動物けい留所(豚)を見て回った。この時間帯でも作業をされている人たちがいて、「ご苦労さま」と声かけた。

川越委員長から、隣接して通る高速道路の遮音壁の目隠しタイプの壁が設置された経緯など、「と畜場への差別的な対応」についての話を伺った。その後、「病畜棟」を見せてもらった。

交流会では、バーベキューを準備していただき、労



組の人たちだけではなく、「市場会社」「食肉公社」の人たちも参加。盛り上がった。焼肉をおいしく食べながら、話の輪があちこちで広がった。

30日は、朝8時過ぎに全員が集合。2階休憩室で2つのグループ分けと着替えや、注意事項などの説明を受けたあと、長靴に履き替え、現場に向かった。

牛・豚のと畜解体作業を見学

この日は、と畜解体する牛の頭数が、通常の1日当たり平均牛50～80頭、豚500～600頭よりも少ないこともあって、2グループに分かれ、時間をずらして、牛のと畜解体ライン(工程)を見学。そのあと、豚のと畜解体ラインを見学した。

最後に、「冷蔵庫」と「セリ場(卸売場)」を見学した。今回、ほとんどが初めての参加で、少し緊張の様子だったが、それぞれがさまざまな刺激を受け、「よかった！」と感想を述べていた。

肉はどこから来るのと聞かれたのがきっかけ

今回の「訪問・交流」企画は、上牧小学校の松田暢裕先生の友人である山村宙載さんが、子どもから「お肉はどこから来るの」と聞かれたのがきっかけで実現した。松田先生から「屠畜解体の現場を見学できないか」との相談があり、横浜と場をお願いした。

山村さんは在日としての思いを伝える歌を中心に京都市内でライブ活動を行い、奈良の小学校などでもボランティアとして講演などを行っている。

今回、ひまわりのスタッフや、小学校の先生たちにも声かけた。労組をはじめ、食肉公社・市場会社のみなさんには、相談に乗っていただき、準備などで多くの苦労をお掛けした。感謝の意を表したい。

岡山・長島愛生園を訪問

語り部の中尾伸治さんに話を聞く

「架け橋・長島一奈良を結ぶ会」は毎年、大和郡山市で「架け橋美術展」を催している。そのメンバー11人が4月9日、国立ハンセン病療養所長島愛生園を訪問。中尾伸治・愛生園自治会長に話を伺った。

中尾さんは、自身の生い立ち、療養所に入所した経過、療養所の実態、本人や家族が抱えた苦しい思いなどを切々と語ってくれた。中尾さんは奈良県出身。家族は母と兄の3人。14歳の時、ハンセン病を罹り、16歳の時に入所。以来、70年近く愛生園に住んでいる。



長島愛生園は昭和6年3月、定員400人で開設。政府の「癩撲滅のため」という名目で収容者が増え、3か月後には600人に。徴兵検査で病気が見つかり、収容者は2000人を超えた。職員が少ないため、入所者が食事や排せつ、宿直などを分担する。中尾さんも70種類以上あった園内作業や畜産の仕事、畑仕事など、あらゆる仕事に従事した。

隔離が続き、厳しい差別と仕打ちに遭った

戦中・戦後は「ハンセン病患者など死んでもかまわない」とする政府に見捨てられ、それぞれの療養所は大変な苦しみを受けた。愛生園は海に囲まれているので貝を採るなどしてなんとか飢えをしのげた。

病気の治療は当初、大風子油という効き目があるのかも不明な薬しかなかった。戦後、プロミンという薬が入ってきて、治るようになった。だが、「らい予防法」が廃止されるまで、療養所内でしか治療されなかった。

ノルウェーでは、菌を発見し普通の感染症であることが分かったことで、社会復帰が進んだ。だが、日本では隔離が続けられ、世間に知らされないまま厳しい差別と苦痛が残された。

愛生園に入所した時のことを母に電話で聞いた。保

険所が家に来て、家が真っ白になるまで、井戸の中まで消毒した。母は電話の向こうで涙ながらに話してくれた。兄からは、子どもができた時、「子どもが大きくなるまで帰ってこないでほしい」と告げられた。何度か奈良に帰ることはあっても、家族がハンセン病を恐れることや、近所に知られたくないということを知り、実家には一度も帰っていない。



予防法の廃止後も帰る場がない

県が実施した「里帰り」の時、同行のガイドから母や兄が亡くなっていることを聞かされた。家族や親せきからは教えてもらえなかった。残った子どもたちに、中尾さんのことを知らせていないことも知った。ハンセン病は罹った本人も家族も苦しめる、と改めて感じた。

入所者の多くは高齢の上に後遺症を抱え、家に帰れる状態にない。亡くなっても遺骨を取りに来る人はほとんどいない。取りに来て持ち帰らず、海に捨てられることもある。入所の際には家族に迷惑を掛けないようにと「園名」を付けるように言われる。だが、中尾さんはずっと本名を名乗ってきた。脱走できないようにお金は園券に替えられる。療養所の出入りの際は消毒液に漬けられる。入所者同士の婚姻では断種がされた。人としての尊厳を徹底的に奪い、社会から抹殺する仕打ちがなされ、絶望感を持たされた。

予防法が廃止され、療養所から出られるようになっても帰る場がないのが現実。外出しても周りの目が気になる。療養所に帰ってきたら、ホッとできる。結局、ここが自分の居場所なのだと思う。

中尾さんとは1時間の予定を大きく超えて歓談した。ハンセン病患者は人間の尊厳を奪う厳しい仕打ちの中で生き抜いてきた。この問題を風化させず、取り組んでいきたいと思った。

(次号へつづく)

再設置求め市民集会

天理・柳本飛行場跡の説明板

天理・柳本飛行場跡の説明板再設置を求める市民集会が4月15日、かがやきプラザであった＝写真。



米田哲夫・代表があいさつ。この間の活動を報告し、天理市長の態度は「あったことをなかったことにする」もので決して許せないと憤りを表した。

大阪陸軍造兵廠強制労働体験者の証言を収めたDVD上映のあと、大阪府朝鮮人強制連行真相調査団・日本人側事務局長の空野佳弘・弁護士が「歴史修正主義との闘い」をテーマに講演した＝写真右上。

「大阪陸軍造兵廠は大阪歩兵工廠とも言われ、戦前、アジア最大の軍需工場で敗戦時6万3000人中、朝鮮人工員は1319人。大阪空襲の対象だった。ほとんどの資料が焼却され残されていないので、労働の実態、死亡者氏名や数など、不明なことが多かった」。

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

熊本地震が発生。甚大な被害をもたらした。地震そのものは天災だとしても、被害状況を見ると、人災と考えられることが多い。都市化で人口や建物が密集。被害を大きくしている。安全な避難場所も少ない。もっと空き地を設けておくべきだ。我が国は、世界で起きる地震の1割を占める地震国。そこに原発がひしめく。安全、安心がないがしろにされている。人の命よりも経済成長や、開発が優先される。そのことへの反省が起きてこない。これから復旧に向け、ゼネコンなどが蠢動する。ショック・ドクトリンという3・11後の東北などでの災害ビジネスが富者と貧者を生み、格差が広がる。

この調査は韓国政府真相究明委員会が発表した強制動員名簿を翻訳。「連行先に大阪陸軍造兵廠」と記載されている方を調査した。

「川瀬俊治さんが接触し、この証言インタビューが実現した」。話を聞いていて、その証言の一つ一つが心に突き刺さった。



強制労働体験者の証言を通して見えるもの

空野さんは、「証言」を通して浮かび上がるのは、「国家犯罪としての強制連行、強制労働」であり、日本政府は「戦争犯罪」であり、「強制労働条約違反」「人道に対する罪」を想定したからこそ、敗戦直後に徹底して記録・書類を処分したと述べ、日弁連による勧告「重大人権侵害の被害者の被害回復を求める権利」（2002年）を紹介した。歴史の教訓化と歴史修正主義との闘いにも言及。諦めずに闘おうと呼びかけた。

このあと、ヘイトスピーチを考える西宮市民の会の小西和治・共同代表が報告＝写真。西宮甲陽園にある「地下壕」が、西宮市長（維新の会）によって「崩壊の危険」を理由に埋め立てられ、

設置された案内板には「朝鮮人労働者」の記述がない、と説明した。最後に、全員で「要望及び行動提起」を確認した。



■お知らせ NPO法人なら人権情報センター事務所は4月から、土曜日にも休みになりました。

ニュースレター「人権なら」

発行：NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/